

書くことで 知らせたい



にい だりょうこ
新井田良子さん
(宮前区宮崎在住)

現地を歩き原文資料を元に

69歳のときに新人作家としてデビューした新井田良子さん(73歳)は、今なお現地取材を元にした歴史小説を中心に執筆活動を続けています。

新井田さんが、デビュー作の『草梁の丘』を書くことになったきっかけは、幕末の会津に生まれ、晩年を日本支配下の釜山(朝鮮)で過ごした曾祖母の存在を知ったことからです。曾祖母の生きた時代を知りたいと、資料探しに会津や釜山を何度か訪れました。現地の資料を重視する新井田さんは、ハングルの資料を読みこなすために、ちょうど宮前市民館で開催していた成人学校『ハングル入門』を受講し、そこから生まれたサークルでも韓国語の勉強を続けます。2回の韓国

訪問で集めた資料を約1年かけて翻訳し、それからさらに1年半かけて、ある会津の女の一生を描いた歴史小説に仕上げました。

不当な扱いを受けている人を描く

こんな行動派の新井田さんには、文筆関係の職歴はありません。書くことへの情熱は、若い頃からドイツ語の原書を読むのが趣味だった新井田さんが、あるときナチスの強制収容所を扱ったものを読み、衝撃を受けたことから湧き上がります。その本を日本の人にも読んでほしいと自力で翻訳したのが6歳のとき。その翻訳本は出版には至りませんでした。文章力の確かさは、出版社の人に「書き続けてください」と評価されました。ナチスのことを伝えたいという思いは消えず、ドイツのブーヘンヴァルト強制収容所を2回訪れ、膨大なドイツ語原文資料を集めました。当初はノンフィクションで書こうとしたものを、ナチス側からの心の葛藤を描こうと方向転換。2002年に『ブーヘンヴァルトのドーナル槽』を完成させました。出版社探しに奔走しましたが、結局自費出版に踏み切り、その年の日本自費出版文化賞の文芸A部門

(小説・ノンフィクション)に入選しました。その後、障害児・者をテーマにした童話『レプン星のゆっぴい』や、会津白虎隊の隊長日向内記の孫で関東学院の創始者である坂田祐の生涯を描いた『祈りの人 坂田祐』などを書き上げましたが、今のところ出版してくれるところがみつからない状況だそうです。

現在の新井田さんの楽しみは、今はやりの韓国ドラマを原語で観ること。『冬のソナタ』も韓国語の会話でわからない部分が多かったため、韓国の放送局KBSのホームページから台本をダウンロードし、それを翻訳。その台本片手にビデオを観ては泣いているという、努力家&ちよっぴりかわいい新井田さんです。



『草梁の丘』新幹社
上下巻各 1800円



『ブーヘンヴァルトのドーナル槽』
講談社出版サービスセンター
1500円

問合せは新井田(山田)さんへ
TEL/FAX 044-855-2798